幼児の教育　第105巻　第3号　平成18年3月1日（毎月1回発行）昭和23年4月15日第3種郵便物認可　ISSN0289-0836

幼児の教育

家庭・保育所・幼稚園

第105巻　第3号　日本幼稚園協会　2006 3

好評発売中！

手づくり アンパンマンがいっぱい 8 イベントおしらせデコレーション

千金美穂・尾田芳子 共著

大人気シリーズ『手づくりアンパンマンがいっぱい②ルームデコレーション』の続刊です。色画用紙から生まれたアンパンマンワールドの仲間たちが、季節のイベントをにぎやかにおしらせします。アンパンマンたちと一緒に、園生活を楽しく盛り上げてくださいね。

定価2,100円（税込）
26×21cm　96頁

★巻末の型紙をコピーして、簡単に製作できます。

★型紙の組み合わせ次第でいろいろなバリエーションを作ることもできます。

【既刊】手づくりアンパンマンがいっぱい

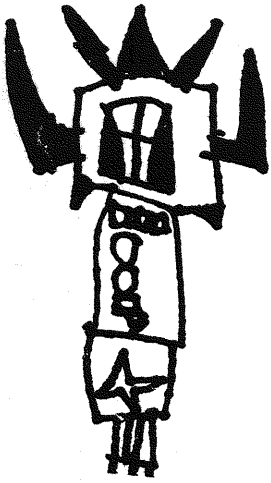
1.	グッズ・プレゼント	島田明美	5.	通園グッズ	島田明美
2.	ルームデコレーション	千金美穂	6.	つくってね あそんでね	島田明美
3.	ぬいぐるみ・おもちゃ	コッペ平沢	7.	つくってね あそんでね パート2	島田明美
4.	ランチとおやつ	大森いく子			

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部（03）5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育

第105巻　第3号



幼児の教育　目次

――第一〇五巻　第三号――

巻頭言「子どもの世界を楽しむ」……岸井　慶子…（4）

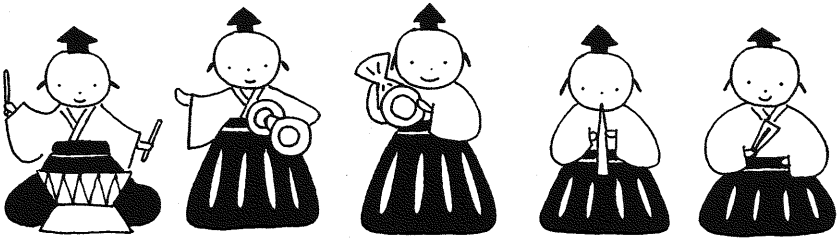
反抗期の親子関係
――一歳から三歳までの縦断研究が教えてくれるもの――……高濱　裕子…（8）

保育「方法」考　(二)……戸田　雅美…（16）

カリフォルニア滞在記　(一)　――渡米前後に起こったこと――……岩立　京子…（22）

私が通った幼稚園・保育園(10)
私と幼稚園――現在（いま）に続く道の始めとして――……豊田　一秀…（30）

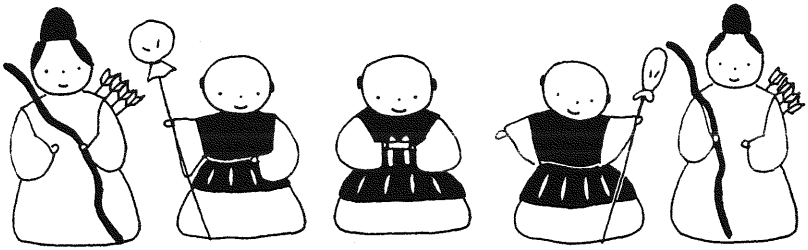
© 2006
日本幼稚園協会



特集〈たね・種〉

植物の育成になぞらえた育児論……藤田　博子…（36）
青年海外協力隊で育った種……佐竹　直子…（40）
乳児の『たね』は生活の中に……濵口　敦子…（44）
永遠の情景……中嶋　正敏…（48）
高尚な精神を育てる教育……津守　眞…（51）
たけのこ幼稚園とラジオのおっちゃん(12)……庄籠　道子…（56）

表紙絵／さのまきこ
扉題字／津守　眞
扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児
カット／さのまきこ
編集委員／浜口　順子・佐藤　寛子・吉岡　晶子
編集部／河合　聡子



巻頭言

子どもの世界を楽しむ

岸井　慶子

五年ぶりに短大に戻った。もともと幼稚園現場のほうが長いので「戻った」といういい方はあたらないかもしれない。ともあれ、三歳から六歳の子どもたちの声や、愛らしくも必死に活動する姿に囲まれて毎日を送る生活から、短大生とともに保育を考える生活へと変わった。その生活変化の中で痛感したのは、笑わなくなった、ということ。お腹の底から笑う機会がかなり減った、思いもかけぬことに出会うことが減った、ということ。

それでも時おり、ビデオを片手に保育観察をさせていただく機会に恵まれる。それは私にとって、大いに子どもの世界を楽しみ味わう絶好のチャンスとなっている。担任や園長を務めていた時のような責任から離れて、ある意味で自由なゆったりとした目で子どもの世界をみつめる機会となっている。先日も思いがけず、必死で笑いをこらえながらビデオを撮り続ける場

面に出会った。

それは二年保育四歳児学級で、ひと遊び終わったあとの十一時すぎのこと。数人の男児が楽しんでいたマジレンジャーごっこがだんだんエスカレートしていった。内の一人が相手の持っていた空箱を奪い取って挑発。さらに、その箱で相手の頭をペコンと叩いた。その音が、ペコンだかポコンだか何しろ楽しくなってしまう音だったようで、たちまち広まった。四、五人の男児が面白がって誰かれかまわずペコン、ペコン、と相手の頭を思い切り叩きまわる。ちょうどその時、園庭から「お部屋の人も、そろそろ片付けましょう……」という担任の声。その途端、全員が申し合わせたように一斉に自分の頭をペコン、ペコン、ポコン、ポコンと叩き出した。

行動がだんだんエスカレートしてきたのを見てきた私は思いもかけぬ展開に笑いをこらえきれず、片手でビデオが揺れないようにしながらもう一方の手で笑い声がもれぬようしっかりと自分の口を塞ぐこととなった。

また、同じ日に五歳児の学級では、段ボールをいくつも使って様々なものを制作するグループ活動の様子を観察することができた。

四、五人が丸くなって座り、恐竜の首になる段ボールを胴体部分にガムテープで固定している場面。いつのまにかガムテープを切る人、貼る人の分担ができてきた。A男がガムテープを渡され指で切ろうとする。なかなか切れない。引っ張ったりねじったり、苦労している。そのうちよじれて貼りつき使い物にならなくなったガムテープを、どうにかしてくれとでもいうように隣のB男に差し出す。しかしB男は自分の作業に忙しく取り合ってくれない。今度は反対

側のC男に差し出すがやはり取り合ってくれない。すると、D男が近寄ってきて受け取り、よじれたガムテープの端を引き剥がすようにしながら切り始める。

この様子を私は「どうなるのだろう」とはらはら、どきどきしたり「ああ良かった、友達っていいな」などと喜んだりしながら見続ける。時々「がんばれ」という思いを込めてA男の手元や表情をアップにする。とうとうあきらめてしまい、なんとなくしょげた様子のA男の姿に、なんだか見てはいけないものを見てしまったような気さえする。

しかし、しばらくして再びA男がガムテープをちぎる場面となる。今度はややぎこちないが切った。なかなか一度では切れないが切った。肩から手までを大きくひねるようにする。二、三回繰り返すと、今度は無駄な動きをしなくても切れる。

ここで私は「やったー」と喜び、「すごい」と驚く。何かとてもうれしくなり、なぜか得をしたような気持ちになる。

保育後に、今度は担任の先生方とビデオを見ながら話し合う。もう一度、楽しめる。先生方と笑ったり、驚いたり、はらはらしたり、考え込んだりしながら今日の保育を、今日の子どもの姿をもう一度味わわせてもらう。ビデオを細かく見直すことで新たな発見もある。例えばガムテープが切れなかったA男が隣で切っている男児の手元をじっと見ている姿があり、切れるようになる迄の時間がわずか（A男にとってわずかと言ってよいかどうか、考えなければならないが）二十分であったこと。また、四歳児の遊びが暴力的な方向にエスカレートしていく時に突然笑わせるしぐさが出てきてその場の緊張が緩む場面が幾度も見られることなど、その他

にもたくさんあった。そして、先生方のお話からそれまでの経過や先生方のそれぞれの幼児に対する思いのいろいろを知り、より深く多面的にその場やその行動の意味を理解することになる。

こんな風に、少しだけ無責任なところから子どもの世界を見せてもらえるのが今の私にとって楽しくて楽しくてたまらない。それはもちろんビデオ観察を受け入れ、一緒に見直し、発見し、話し合ってくれる先生方の存在を抜きにしては考えられない。先生方や子どもたちに感謝したい。そして、子どもの世界は「みる」のではなく「みせてもらう」ものだという思いをますます強くしている。

今、大きな転換期を迎えている保育界では、子育て支援、幼保一元、第三の幼児教育施設などなど幼児教育の制度や現実的な対策、方法に関する論議が多く聞かれる。あちらこちらで開かれる研修会で取り上げられる内容もしかり。次々と変化する状況への対応に追われ、ゆっくりと幼児の世界を楽しむゆとりを失っている保育者もいる。ていねいに子どもの行為を記録し読み取り、その意味を考え、自分の保育のありようを考える。それらを仲間と議論しながらより深め、子どもの世界に近づく。そんな地道な作業が減ってきているのではないだろうか。かつて、私たちが先輩保育者のリードのもとでああだこうだと議論しながら学んだ「子どもの姿から学ぶ」ということが、次の世代に十分伝わっているのだろうか。少し心配している。

（千葉明徳短期大学）

反抗期の親子関係

―一歳から三歳までの縦断研究が教えてくれるもの―

高濱　裕子

ある学会で、「反抗期における親―子システムの変化」というタイトルのポスター発表をした。何人もの参加者から「これは思春期の研究ですか？」とか「この反抗期は第二次反抗期のことですか？」という質問を受けた。予想外の反応に戸惑ったが、今の日本では中学生や思春期の子どもたちのさまざまな問題に関心が集まっていることを改めて感じさせられたのである。

私と共同研究者の関心は、生後二年目頃から始まるといわれる第一次反抗期にある。この研究は、第一子の子どもとともに親をも研究対象にした点が特徴であろう。

反抗期の親子関係を検討する目的

この時期の親子関係を検討する目的はふたつある。第一に、親―子システムがどのように変化するかという点

である。子どもの誕生以降、親は子どもとのかかわりを通して経験と勘とをたよりに関係を構築してきた。しかし、ある日突然始まる子どもの強い「イヤ！　イヤ！」や「自分で！（と親の手を振り払う）」に直面し、親はそれまでのやり方が通じなくなったことを感じる。これは安定していた親―子システムが、子どもの発達的変化によって不安定になったことを意味する。不安定になったシステムはどのようにして安定を取りもどすのだろう。

日本では、子どもの自己主張が積極的に方向づけられないようだ。幼児期の自己主張・実現面の発達は四歳頃をピークに停滞や後退を示すのに対し、自己抑制面は年齢とともに伸長してゆく（柏木　一九九八）。ということは、反抗期は親に抑えこまれて収束するのだろうか。

第二には、親―子システムの中で何がおき、どんなことが進行しているかという点である。育児書の解説には、「だいたい三歳を過ぎるとききわけが出てくる」とか「理解力や言語の発達によって、自分を納得させる力が育ってくる」とある。しかし、この変化のプロセスを具体的に示すデータはほとんどない。

電話による育児相談の内容を参照すると、一歳半頃までは発育や健康に関する内容が上位にある。ところが二歳を過ぎるとしつけに関する内容が上位を占め、それと同時に子どもがなかなかいうことを聞かないことに悩む親が出てくる。

この変化は、子どもが生地のまま自分を表出することに対して、親が積極的に介入することで引きおこされる。これは通常〝社会化〟と呼ばれ、子どものさまざまな要求やふるまい方をその生まれ育つ社会や文化に受けいれられるような形に方向づけることをさす。子どもの反抗や自己主張が強まっていく中で、それらを考慮しつつ社会化を実践することはそうたやすいことではない。

反抗期についての親の認識

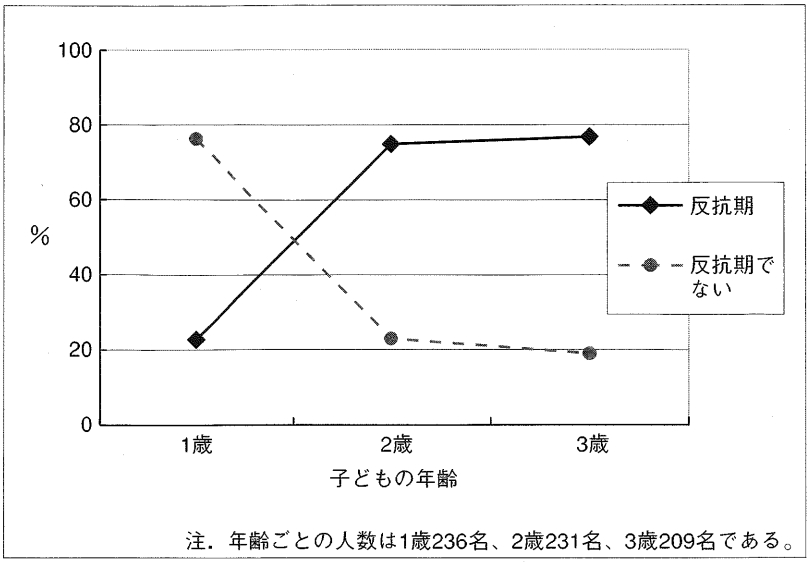
まず、どのくらいの子どもたちが反抗期にいるのだろ

うか。図1は、年齢ごとに子どもが反抗期にいるか、反抗期にいないかを大雑把に分類した結果である。一歳では反抗期と認知された子どもは約二割であるが、二歳と三歳では八割近い。つまり二歳以上になると多くの子どもが反抗期にいると親に認識されるのである。

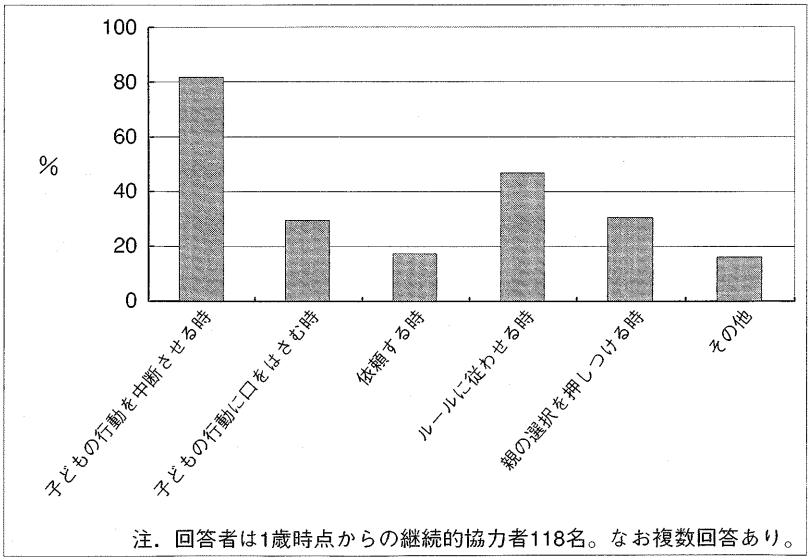
反抗といっても子どもによる個人差が大きいことは、二人以上の子どもを育てた経験のある人ならわかるだろう。また親側の受けとめ方の個人差もある。さらに子どもは四六時中反抗しているわけではなく、状況にもかなり依存する。図2に子どもが反抗的になる時や場面を示した。このデータは、図1の子どもが二歳になった時点で回答していただいた結果である。

最も多いのは「子どもの行動を中断させる時」で八割の親があげた。次に多いのは「ルールに従わせる時」で約四割、次に三割台で「親の選択を押しつける時」と「子どもの行動に口をはさむ時」が続く。この結果からは、親の意図（こうさせたい・こうさせたくない）と子どもの主体性（何かをしたい・何かをしようとする）とがぶつかりあう様相が見える。親の都合にあわせることや、親の要求にそのまま従うことから抜け出しつつあることがわかるだろう。

次に、図3（十二頁）の子どもの反抗に親がどのような感情を抱くかを見ていただきたい。回答者は図2と同一の親であった。最も多いのは「いらだつ」で八割を超えた。次に「腹が立つ」の約八割、「困惑する」と「いやになる」が六割強、「がっかりする」が約二割である。これだけ否定的な感情が喚起されるとすれば、冷静に対処できないという親の悩みも納得できよう。ある特定の感情だけでなく、複数の否定的感情を抱く親が多いこともわかる。一方「うれしい」や「元気が出る」といった肯定的感情も、約二割程度あげられた。このような親の感情面へ着目した研究が少ないことも、私たちには不思議であった。



▲図１　母親の認知した反抗期

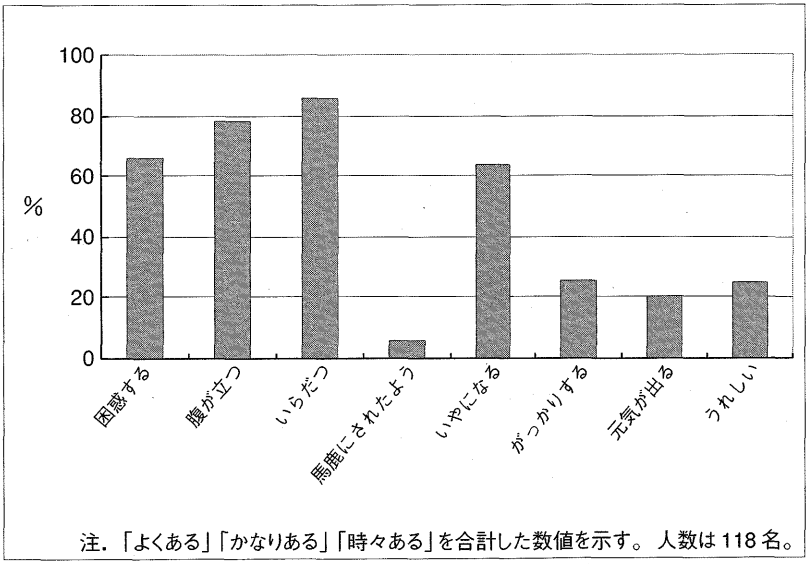


▲図２　子どもが反抗的になる時

母親の心理的負担と社会的資源の利用

私たちは子どもが一歳九か月頃から三歳を過ぎるまで、一か月半に一度のペースで家庭を訪問させていただいた。反抗の始まりの時期や反抗・自己主張の程度には個人差があるが、子どもたちは二歳半前後には強い反抗と自己主張に彩られた反抗期のピークを迎えた。

この時期の子どもの特徴には、声をかけると返事のかわりにまず「イヤ！」という、「一日何十発『イヤ！』といったら気がすむんだろう？」というものがあった。食事や片づけをめぐる激しい対立、外出先の売店で初体験したおもちゃをほしがって地団駄ふむ子どもとの格闘、入浴させたい親と好きなビデオに執着してそれを拒む子どもとのバトル、一旦機嫌を崩すと泣き叫び収拾がつかなくなる子どもとの葛藤など、母親の語るエピソードはリアルであり、それだけに混乱や苛立ちがひしひしと伝わってきた。戸外に出れば親子ともに気分が変わる



▲図3　反抗期の子どもに親が抱く感情（2歳）

のはわかっていたが、「この子がまたよその子に手を出すんじゃないかと思うと外出できなかった」と話す方や、「親のいいなりになる子どもなんて気持ちが悪いと思っていたが、こんなにすごいものだったのか」と語る方もいた。「どれほど苦悩したのだろう？」と、話を聞かせていただく私たちも胸が痛んだ。

多くの母親は子どもが成長したと感じるエピソードも教えてくれたが、こちらは積極的に評価しない。反抗や自己主張が強すぎてかすんでしまうのだろうか。おそらく、母親の知覚は気になることに焦点化されるため、他の側面（特に肯定的な側面）があまり感知されないのだろう。

この研究では、親子をとりまく環境（さまざまな資源といいかえてもよい）も視野にいれた。例えば夫婦関係や、親戚や友人に代表される社会的資源との関係である。そこで明らかになったのは、子どもの自己主張や反抗が強まるにつれて母親の心理的負担が増大するが、多くの母親が社会的資源を利用しながらその負担を軽減させていったことである。中には保育所の保育士のアドバイスが有効に機能したケースや、それまであまり育児にかかわらなかった父親がわが子の強い反抗に巻き込まれてかかわるようになったケースもあった。

生物が生存するためには、周囲の環境（生態学的ニッチ）を利用するだけでなく、環境の変化に応じて利用の仕方を変えていくことが必要である。気温や湿度に対応したミミズのアフォーダンス（Reed, 2000）はよく知られた例である。ミミズと人間を同等に扱うのはおかしいといわれそうだが、生物である以上適応戦略としての行動に差異はない。母親たちは周囲の資源を上手に活用し、わが子の反抗期に適応していった。

反抗期の子どもと親の共変化

三歳近くなると、反抗のための反抗やわけのわからない反抗は減少するようだ。その背景には、二語文や三語

文といった言語の発達、あるいは記憶や理解の進展にみられる認知発達の影響がある。親の方でも「理由があっていやがっているんだ」とか、『どうして？』と聞くとわけを話そうとする」というように子どもの変化に気づく。しかも、その変化に上手にのって対処できるようになる。このようなかかわりが、さらに子どもの言語発達を促進すると考えられる。

激しい情動反応を示す子どもに、否定的な感情を抱く母親がいた。何を訴えているのかつかめず、しかも激しい泣き叫びをなだめる方法もみつからなかった。ある日「ママ、大好きなの！」と発したことばに、初めてわが子の心情を理解した。抱き寄せて「ウン、ウン」とうなずきながらなだめたという。この時期の子どもは一時的に分離不安が強くなり、親に依存的になることがある。母親は自分から離れても大丈夫な子と思っていたが、実はそうではなかったのである。

自分自身の感情をコントロールすることの難しさを訴える親も多かった。「私が感情的になると、子どももワーッとなって叫ぶ」という。反抗期の子どもという刺激から目をそらすような対処を心がけた親もいた。そばについているとイライラするので「先にお風呂にはいっているわよ」と声をかけ、遊びをやめない子どもから離れるようにした。その結果、子どもは納得して自分でけりをつけることが親にもわかってきた。

これらは極めて重要なポイントを示している。親が子どもの変化にあわせて自分自身の対応をふりかえり、あるいは見直し、親行動を修正していった結果なのである。この変化とともに、「子どもとのやりとりがとても楽しくなった」と報告する親が多いことも印象に残った。子どもの変化に適応できない時、親側にも子ども側にも不都合が生じることは、多くの臨床事例が示す通りである。

反抗期は子どもの自我発達にとって重要であり、養育

者はむやみに抑えつけてその芽を摘みとってはならないといわれてきた。しかし私たちの研究からは、子どもと親の双方にとって重要な時期であることが明らかとなった。この時期はそれまで培った親子の関係を再組織化しなければならず、それが親にとっての難しさを生み出すと考えられる。

まとめにかえて

家庭では親子が一対一で対峙する状況が多く、一旦閉塞状態におちいるとそこから抜け出すことが難しい。

一方大勢の子どもがいる保育の場では、そのような状況におちいることは少ないだろう。しかも保育者は、反抗や自己主張の背後にある子どもの意図を適切に読みとることができる。専門職の保育者が子どもの意図を推測することは当然かもしれないが、親にとっては案外難しいのである。

私たちの研究から、保育者の社会的資源としての役割の重要性が示唆された。大人と子どものかかわりのひとつのモデルとして、遊びの中で発揮される子どもの多様な姿の紹介者として、あるいは子どもとのかかわりの楽しさや豊かさを伝えてくれる専門家としての役割を再認識したい。これらは保育分野が長年蓄積してきた成果であり、非常に得意とする面でもある。親子にとっての〝地域の利用可能な資源〟というとらえかたは、親側の選択肢の幅を広げるためにも必要であろう。

（お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター）

引用文献

柏木恵子『幼児期における「自己」の発達―行動の自己制御機能を中心に』東京大学出版会　一九九八

エドワード・S・リード著　細田直也訳　佐々木正人監修『アフォーダンスの心理学―生態心理学への道』新曜社　二〇〇〇

保育「方法」考（二）

戸田　雅美

一、はじめに

教育「方法」という言葉は広く使われる言葉である。保育「方法」という言葉も使われる言葉であるし、私自身も使う言葉である。しかし、保育の場面の中で「方法」という言葉を使うことにはある種の「違和感」を伴うことがある。

この論考では、保育「方法」という言葉に伴う「違和感」を自覚化して検討した上で、保育における「方法」という言葉と「方法」という言葉の一般的な意味とのずれについて吟味することによって、保育における「方法」のとらえ方について考えてみたい。

すでに、前回〈保育「方法」考（一）〉（十二月号）では、私自身の中での「違和感」の存在とその在り様を明らかにした。今回は、この考察に基づいて、

保育における「方法」という言葉について吟味してみたい。

二、「方法」という言葉と因果論

私の中でこの問題を考えるときに、繰り返し立ち戻らずにはいられない論考がある。津守眞氏の『保育者の地平』（ミネルヴァ書房）の中の「手を開く」（p34）という論考である。

いつも母親といることを求めるV夫は両の拳を握っていることが多い。ときには、セロテープを自分の手に巻き付けて手を開かないようにしたこともあったという。このV夫にF先生がかかわっていく。その中で、たとえば、あるときボール紙の手のひらの形を切り抜く。そして結果としては、そしておそらくこの「ボール紙の手」が一つの意味をもって、V夫は頑なに握り締めていた手を開く。この事例を紹介した後で、津守氏はこのことを次の様に省察している。

私は、保育者がこういう保育をしたから子どもがこんなによくなったという考えは取らない。この子どもとこういうふうに工夫してかかわったら発見があっておもしろかったというように考える。前者の考えには因果論の残滓があり、自分の力でこうなったとのおごりに結びつきやすい。一つの小さな成長にも多くの人がかかわっている。そして何よりも、子ども自身の選択と意志が育てられることによって、確かな未来が開かれる。

津守氏はここでは「方法」という言葉は使ってはいない。その点も含めてここから先は津守氏の論考の解釈ではなく、この論考に手がかりを得た私の考察であることを確認しておきたい。その了解の上で「方法」という言葉について考えてみよう。

第一に浮上してくる問いは、「方法」という言葉を因果論と無縁なものとして使うことは可能か？というものである。

料理のレシピ（方法）にしろ、運転の仕方（方法）にしろ、科学的な実験（方法）にしろ、およそ「方法」という言葉によって語られる事柄は、ある現象を「原因」と「結果」という思考で分析し、その「原因」と「結果」を反転させて、その「結果」のための「原因」をくくりだすことによって成り立っている。つまり「結果」との関係を反転させたときの「原因」のことを指し示すための言葉が、「方法」という言葉なのだということに思い当たる。さらにそこには、その現象の「再現可能性」というファクターが不可欠である。

料理のレシピは、同じ料理を再現できるということが前提となっている。その上で、その料理を出現させた「原因」となった事柄を特定する。そのように「結果」から反転して特定された「原因」を「方法」とすることで、そのレシピは価値をもってくる。そのレシピ、すなわち「方法」に従えば意図する料理を作ることができるという点が決定的に重要なのである。

三、因果論で語りうる範囲とその限界の意味するもの

「方法」という言葉が因果論と無縁なものではありえないとしたら、保育「方法」という言葉に感じる「違和感」の所在は因果論にあるのではないだろうか。

先に、料理の例を因果論で語りうる一つの典型として考察の対象としてみたが、料理であっても、実

は因果論の範囲を超えてしまうのではないかと考えられる例はある。たとえば、優れた料理人のレシピ（方法）の通りに料理したとしても、正確な意味で「同じ」料理は作れないだろうことは容易に想像しうるからである。このことは同じ料理人が、食べる人にとっていつも「同じ」と感じられる料理を作るためには、材料となる素材の個性や育ち方の違いによって、調理の時間を微妙に変えたり、食べる人の体調や状況を予想して味付けを変えたりする必要があるという事実からもいえるだろう。つまり、たとえ料理の「方法」であっても、因果論で語りうる範囲には限界があるということである。同様にその「再現可能性」にも限界があるということなのである。

先にあげた津守氏の論考の中に「一つの小さな成長にも多くの人がかかわっている」という一文がある。たとえ「一つの小さな成長」であっても、保育が人間という複雑な存在の成長というものを「結果」として想定する営みである以上、「その小さな成長」という「結果」の「原因」となったものを、反転させて「方法」としてくくりだすことは容易なものであろうはずがない。

前回検討した事例でも、無理に友達の遊びに入ろうとしてトラブルを起こすことの多かった三歳児の**ゆり**が、いくらか安定して友達に受け入れられ遊べるようになった「原因」は複雑なものであった。たまたま妹にあたる赤ちゃんの検診についていくという経験があったこと。そして、何より、**ゆり**自身がその経験に強い興味をもち、それをごっこ遊びにしてみたいと思ったことがある。さらに、その**ゆり**の思いの強さに気づいて、援助しようとした保育者が存在する。さらに、保育者は**ゆり**の思いである病院ごっこをするために廃材で聴診器を作る。そこで、**ゆり**は病院ごっこが気に入って集中して一人でも遊

ぶことができ、そこにその遊びが面白く見えた他の子どもが入れてもらいたくなって、友達との遊びが落ち着いて成立し始める。この中で「方法」として比較的明確に取り出せるのは、ゆりが病院ごっこをしようとしたときに、保育者がゆりの思いを実現する一つとして、聴診器を作ったことぐらいだろう。

ここに述べたいくつかのポイントだけでも、その偶然性やゆりの興味の行方の絡み合いは十分に複雑であって、にもかかわらず「再現可能性」も高いともいえず、それをあえて「方法」としてくくりだすことは、あまり価値を認められにくい、しかも困難な作業に過ぎない。ここに因果論の一つの限界を見ることができる。つまり、「人間として生まれた存在が真に人間としてその時々を生きて育つ」という問題を扱うのには、因果論はあまりにもシンプルだということを意味するのである。

四、保育という営みと「方法」

保育には、病院ごっこをしたいという思いを受けて聴診器を作るというような「方法」の他にも、三歳児を静かに移動させたいときには忍者に変身させるといいとか、集まったときには手遊びをすると次の話を集中して聞きやすいとか、サッカーをするときには狭い空間でやるとボールを追いかけるばかりではなくシュートする楽しみが容易に味わえるので良いなど、場合によってさまざまな「方法」がある。それらの「方法」は必ずしも無意味なものではなく、この場合のこの場面でこの現象が起きるためには、というように限定的に考えればまさに「方法」として機能しうる。

しかし、保育の営みが「人間として生まれた存在が真に人間としてその時々を生きて育つ」という問題に向き合うものである以上、そこにおいては「方

法」という言葉を使うことが「違和感」を感じさせるものにならざるをえないことは、すでに検討した通りである。では、保育以外の教育において「方法」という言葉が「違和感」を感じさせるものでないとしたら、それは何を意味するのであろう。もしそうだとしたら、それは、そこで向き合っている教育の問題が極めて限定的であって、教育本来が向き合わねばならないはずの問題、すなわち「人間として生まれた存在が真に人間として生きて育つ」という問題に向き合ってないことを意味するであろう。このように考えたとき、保育には「方法」がないという批判は、もはや批判ではなく、その意味を逆転させるともいえる。

では、保育に「方法」がないことは場当たり的だ、という批判にはどのように答えうるのだろうか。「人間であること」や「真に人間としてその時々を生きて」、「育つ」こととの関係において保育行為を判断することが、「方法」という言葉で掬い取ることができ得ないほどのものだとしたら、その問題の複雑さに応じた言葉によって掬い取りつつ検討する以外にはない。保育における「省察」の存在理由は、「方法」という言葉では掬い取ることのできない問題を検討するための別の次元の言葉の網の目を意味するとも考えられよう。「省察」によって言葉の網の目の中に保育行為が掬い取られ、吟味されることによって、場当たり的であるという批判を無化するものであるということができるだろう。

五、おわりに

保育の「方法」という言葉について一つの論考を試みた。この中では「関係性」の視点からの検討をすることができなかった。この点についていずれ機会を得て、考察していきたい。

（東京家政大学）

カリフォルニア滞在記（一）

―渡米前後に起こったこと―

岩立　京子

日本という社会のなかでそれなりに適応している家族が海外へ移住するとき、どんな変化が起こるのでしょうか。新天地での自由と解放感に満ちた日々、楽しく快適な生活がスタートすると思いませんか。実は私もそう思っていたのですが、渡米直後は、一歩間違えれば大変なことになる綱渡りのような生活が待っていたのです。

ここでは、小学生と高校生の子育て中の家族が海外に移住するときに起こった変化とその後について、一人の母親、そして大学教員である私の視点を通してご報告していきたいと思います。

渡米前の家族の変化

私たち夫婦が日々の会話のなかでほんの軽い気持

ちでサバティカルの話をし始めたのは渡米の数年前、そして手続きを含めて具体的な計画を考え始めたのが一年前でした。思い返せば、その頃より家族が少しずつ変化し始めていたようです。家族のそれぞれが、これから起ころうとする一大変化について考え、「今の生活」を中断し、見知らぬ場所に行くことの不安や楽しみ、そして、そこで適応するための方法などについて日々の会話のなかで触れるようになりました。仕事の処理、住居その他の生活の中断手続き、病気の治療の継続、年老いた親の介護の引き継ぎ、そして子どもたちの転校など、当たり前に進行していた内容一つひとつに区切りをつける方法や、見知らぬ国での生活や学校のことをぼんやりと思い描くようになったのです。最初に私が遭遇した問題が、二人の子どもが「どうしてもアメリカに行かなくちゃいけないの？　行きたくない」と言い出し、特に高一の息子が悩みに悩んだ末に日本に残ると決意したことでした。私は家族で一緒に行くことに意義があると思っていましたが、「勉強が一年ぐらい遅れたっていいじゃない」という私の軽い考えは、日本のシステムのなかでまじめ（？）に生きている高校生には通用しませんでした。結果的に今回の渡米によって家族が離ればなれに暮らすことになったのです。

出発の一か月前からは、私や夫は仕事の残務整理に奔走し、娘はこみあげてくる不安に自分なりに対処しきれず機嫌の悪い日が多くなり、息子は口数が少なくなったかと思うと、急に「家族ってやっぱりいいな」などとつぶやいたりして、家族が揺れ動くようになりました。

時が矢のように過ぎ、いよいよサンフランシスコへと発つ当日。空港で家族全員で食事をした後、私たちが搭乗口に入るときがきました。「じゃあ、春ちゃん（息子の呼び名）、行ってくるよ。元気でね」と息子と両手で握手をしたときです。息子が目を赤くして、口を真一文字に結び、こみ上げる複雑な感

情をこらえているのがひしひしと伝わってきました。私は元来涙もろく、特に子どもの涙には弱いので、悲しい別れにならないように思いっきりの笑顔で「じゃあね、アメリカへ遊びにおいでねー」と言いながら手を振り、さっと背を向けて搭乗口に入りました。搭乗口を抜けながら、「こんなときに泣くなよー、たったの半年じゃない！」と心の中で息子を責めながら、一方で「こんな計画をたててよかったのだろうか、息子にだけ不自由な思いをさせていいのだろうか」と自責の念にかられました。離陸の瞬間に感じるはずだった雑務からの解放感は、息子の涙のおかげで吹き飛んでしまいました。

サンフランシスコ統一学区（SFUSD）と小学校入学手続き

私たちがサンフランシスコ国際空港に着いたのは八月二十二日の午前九時三十分。気温十四度、手荷物を受け取り、空港の外へ出たときには肌寒さを感じ、鳥肌が立つほどでした。

さあ、いよいよサンフランシスコでの生活の始まりです。数日のうちにアパートの入居手続き、家具のレンタル、電話の契約、それに並行して娘の入学手続きなどを済ませ、何とか新学期開始に間に合わせなければなりません。

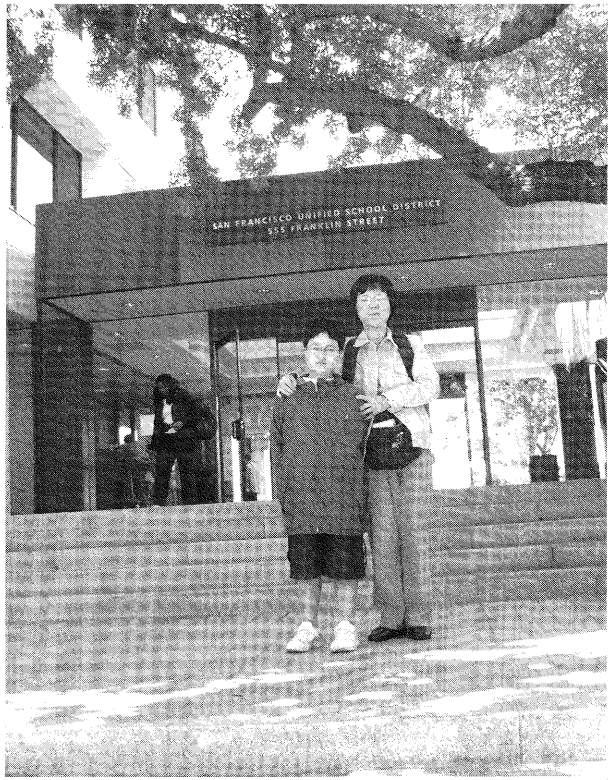
翌日、ホテルから入居予定のアパートの事務所に直行し、賃貸契約をすることにしました。まずは寝場所を確保しなければ。日本にいるときにインターネットでレンタカーやホテル、アパートの仮契約などを済ませておいたのですが、実際に事務所で契約をしてアパートへ行ってみると、入居予定日なのに内装は済んでいない、家具の搬入は遅れる、キッチンのライトはつかない、バスタブの管がつまって水が流れないなど、次から次へと予想外のことがありました。それでも、何とか一つひとつ問題を解決し、いよいよ私たちが最も気にしていたSFUSD（San Francisco Unified School District）での娘の

入学手続きをすることになります。

次年度（九月）入学の手続きは前年度の十一月頃より始まるので、本来はその頃より、公立に行くのか私立に行くのかを決定したり、特定の学校を希望したりするのですが、そのためには住所が決まっていなければなりません。私たち夫婦の場合、二人が異なる場所にある大学に受け入れてもらうために、サンフランシスコに住むかオークランドに住むか最後まで決めかねていました。最終的にサンフランシスコに決めてアパートの仮契約ができたのは何と渡米の一か月前でした。それから、アパートに近い学校をインターネットで探し、サンフランシスコの公立学校の入学手続きを統括するＳＦＵＳＤと連絡を取ろうとしましたが、電子メールでは受け付けてくれず、電話か直接訪れるかで予約を取り、予防接種を受けたり、英語の試験を受けなければならないということでした。私は直接訪れて予約を取る計画をたてました。

ＳＦＵＳＤの受付で入学手続きの部署を聞き、その待合室に行くと、中国、韓国、メキシコなどから来たと思われる親子でごったがえしていました。「面接をしてもらえますか」と聞くと、「予約がなければ絶対にだめ。今日、予約を取り、また出直して」などとスペイン語なまりの英語でまくしたてられました。ただでさえもざわついている受付で、英会話力の不十分な私が渡米後三日目に内容を全て聞き取るのは至難の技です。「もう少しゆっくりしゃべってくれませんか！　私たちは外国人で三日前にこちらに来たばかりなのです」と言おうとして、ふと回りをみると、何とそこにいるのはみな外国人で、私たちは特別でも何でもなく、「ああ、ここは外国人の集まりなんだ」いうことにあらためて気づかされました。異なる文化や社会、言語、思考の人々が出たり入ったりするアメリカという国の教育行政や実践は、日本とは比較にならないほど煩雑なのかもしれないと、そのときに思いました。

翌日、予約の時間に行くと、娘はすぐに英語の試験。前日のアルファベットの集中訓練もむなしく、結果はno good。このテストは英語のリスニング、リーディング、ライティングなどの力を約一時間にわたってみるものです。娘によると最初から最後まで英語でいろいろなことを聞かれたり、本を見ながら答えさせたりするもので、さっぱりわからなかったそうです。その後、親同伴で面接が行われ、日本での学年、予防接種歴などを聞かれました。小学校の通学証明書や成績証明書については英文書類を用意していきましたが、予防接種歴については現地で書式をもらい、作成するという助言を受けていたので持っていきませんでした。母子手帳をみながら説明しようとしましたが、うまく伝えられないところがありました。結局、娘は翌日、ポリオ、B型肝炎、水痘、ツベルクリン検査の四本の注射を片腕に二本ずつ一度に受けさせられ、私は副作用でショック死しないかと本当に心配しました。そ



▲SFUSD前で、『これから英語の試験です』

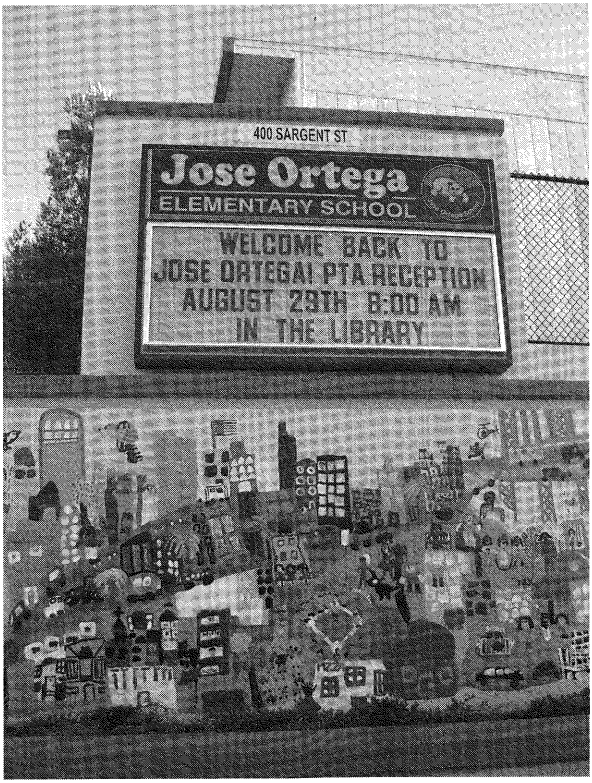
の後も、ツ反検査の結果（腕の赤み）が大きすぎるからという理由でレントゲン検査を要求されたり、その結果が異常なしであるのに、それでも結核に罹患している可能性（？）が十パーセントあるから、抗生物質を九か月間飲み続けることを求められたりと問題が生じました。が、それらの問題も何とか解決し、娘は渡米して十日目から地元の公立小学校に通うことになりました。

ＳＦＵＳＤは一八五一年、カリフォルニアで最初に設立された公立の学区で、プレスクールから高校まで一六〇の学校があり、五万八〇〇〇人の子どもたちが学んでいます。この学区はアメリカの他の学区と同様、独自の使命と信念を宣言し、各学校の改革的なプログラムの推進をサポートしています。こちらでは公立学校といっても、各学校の校長先生が親やコミュニティーと連携しながら、いろいろなところから資金を集めてきて、新しいプログラムを作り、先生を雇ったりして、正に学校を創っていく役割を果たしています。ＳＦＵＳＤでは、新しい言語や文化にうまく適応できるようにニューカマーに対して一年間英語を集中的に学習するＥＬＤ（a sequential program of English Language Development）というコアカリキュラムが推進されています。その他、中国語、スペイン語、広東語、日本語と英語のバイリンガル教育を強調するプログラムなどが、それぞれの学校ごとに特色として打ち出されています。といっても、日本語とのバイリンガルを打ち出している学校はサンフランシスコでは小学校二つと中学校一つしかなく、他のほとんどは中国語、スペイン語のバイリンガルプログラムです。人気のあるのはオールタナティブスクールです。これは新しい使命と信念のもとで先生と親を中心に新たに設立された学校で、独自のプログラムや人的資源を豊富にもち、質の高い教育をしています。これらの学校には希望者の長いウェイティングリストがあり、希望してもなかなか入れないという

ことでした。

私は面接官に、アパート近くのオールタナティブスクールであるレイクショアー小学校（Lakeshore Alternative School）へ入りたいという希望を伝えましたが、枠の空きがないから入れないと言われ、近くのジョセ・オルティガ小学校（Jose Ortega Elementary School）への入学が許可されました。この学校は後でわかったのですが、中国語とのバイリンガルプログラムを推進しているところで、学校便りやお知らせなどは必ず英語と中国語で印刷されていました。

ジョセ・オルティガ小学校には日本人の子どもはひとりもいず、また、日本語のわかる先生もひとりもいません。登校初日に娘はいきなり英語のシャワーを浴び、一時間目に泣いたそうです。図書室で待機している私が休み時間に娘に会いに行くと、「もうやだ、日本に帰る」「絶対帰る」と目を真っ赤にして涙を両腕でぬぐいながら言いました。無理



▲小学校の入口横にある看板と子どもたちの作品

もありません。子どもたちはどの子も多かれ少なかれ周囲の世界を知りたい、よくわかった上で生活したいという欲求をもっています。特にその欲求の強い娘がいきなり訳のわからない世界に投げ込まれ、全くの機能不全に陥ってしまったのですから。教頭先生が娘に細やかな配慮をしてくれ、アメリカ人の女児に娘を縄跳びに誘うように、また、いろいろなことを教えてやるようにと助言してくれました。その後、娘はその女児や先生方がとてもよくしてくれること、遊びと給食の時間が少しは楽しいこと、算数と図工と体育では力が発揮できそうなことを直感したらしく、少しずつ慣れていきました。でも、教室では四六時中、注意を集中して周囲の会話を聞きながらも、ほとんどわからない時間を過ごしてくるらしく、帰宅するとそのストレスを発散するかのように機嫌の悪い状態が続きました。私は「学校で随分がんばっているんだね」と心のなかでつぶやきながら、見守ることにしました。二か月経った今では、娘曰く、友だちと指ずもうをしたり、算数で答えに自信のあるときに挙手をするそうです。きっと、友だちや先生に恵まれているのでしょう。学校への不適応を最も心配していたので、娘が徐々に学校に適応していってくれたことはとてもありがたいことでした。

娘が地元の小学校に入学したために、私は親としてＰＴＡ、給食システム、制服、個人面談、その他数々のイベントなどを経験していくことになります。こういった経験も娘と一緒に来たからこそ得られるものなのですね。

綱渡りの一週間を経て生活や入学手続きが何とか落ち着き始めたので、いよいよミルズへの通学です。次回は、私の受け入れ先のミルズ大学と附属のチルドレンズスクールでの経験を中心にご報告したいと思います。

（東京学芸大学）

私と幼稚園

―現在(いま)に続く道の始めとして―

豊田　一秀

沈丁花(じんちょうげ)の香る頃に

二月の下旬、園庭の沈丁花が咲き始めた。近くを通ると、懐かしい春の香りが流れてくる。卒園も近いな！そんな独り言を頭の中でつぶやきながら、私は日毎に膨らんでくる蕾を楽しんでいた。

ある日、年少組の女の子が二人、背中を寄せ合わせて花の前にたたずんでいる。ふと見ると、一人の女の子の手に手折られた沈丁花の小枝がある。私は思わず「このお花は大切な花だから採らないでね」と話す。二人の、しまった！　というような、少し気まずそうな表情が「そんなこと、わかっているわよ！」と言っているようで、余計なことを言ってしまったかな、と私に思わせた。

それからしばらくして、さっきの二人組を園庭で見かけると、どうしたことか、今度はもう一人の女の子の手にも沈丁花の小枝がある。そして、二人して、さも嬉しそうに各々の手に持った花に鼻を近付けて香りを楽しんでいるではないか。私は「アレッ！」と思いながらも、同時に、自分が言ったことを思い出していた。大事な花だから採らないで……とは、その時の二人組に対して何とそぐわない事を言ってしまったことか……二人は、花の大切さを知らずに採ったのではあるまい。むしろ、大切な花だからこそ採ったのではなかったのか。

もちろん、沈丁花は幼稚園の大切な花である。もしも、多くの子どもが花を手折ったら、たちまちにしてなくなってしまうだろう。しかし、その事実はさておき、自分達が見つけた小さな「春」に心を動かされ、春を手に持とうとした二人。その二人にとっての小枝の価値は、その時、大人のありふれた価値観を超えて貴重ではなかったのか……。

私は二人に気づかれないように横を通り過ぎた。

願わくば、沈丁花の香りが二人の心にいつまでも在りますように。

右の文章は、私が園長をしていた頃に書いた短文である。短い期間であったが、私は自分が卒園した幼稚園の園長を務めていたことがある。ご縁を得て、卒園後四十三年を経て、自分が園長として大和郷幼稚園に戻ったときには、実に不思議な気持ちがした。自分が育てられた、その園の園長になる。育てられてきた者が、育てる者となるという「時の巡り」を思わずにはいられなかったのである。

私は、子どもたちに、私の過ごした幼稚園時代のような日々を与えたいと考えた。幸いなことに、幼稚園の保育に対する基本的な姿勢は、大きくは変わっていなかったので、私は、自分が以前、幼稚園で担任を経験しているということもあり、できるだけ子どもの中にいるような心がけた。時代が変わり、親が変わり、社会が変わったが、目の前にいる子どもを中心として、その子が日々楽

しく過ごせる保育、そして、その子の将来に亘る幸せに続く保育を考えていけば大きく間違えることはないと考えた。雇われ園長としての任務は厳しかったが、子どもの近くで働く喜びは大きかった。

私は、園長を退いた後、大学の教員となり教員養成に携わりつつ今日に至っているが、現在（いま）の自分を思うにつけ、そのルーツとして自分の幼い日々と、幼稚園を思い返さずにはいられない。そもそも、私はこんな子どもであったらしい。

幼い日の思い出と幼稚園

自分の幼稚園時代を語ろうとする時、まず、最初に私がどのような子どもであったのか語らなければならないだろう。これは母から聞いた話なので、「私は知らない！」と声を大にして言いたいのだが……。

私は、相当に扱いにくい子どもであったようで、気に入らないことがあると、車の通る道でも、どこででも、口を尖らせて大の字に寝てしまい、動こうとしなかったそうだ。知能検査を受けた時も、私はテスターの顔と態度が気に入らなくて、「朝、どんなご飯を食べましたか？」、「食べない！」、「何色が好きですか？」、「何色もキライ！」といった調子で、何を聞かれても全て否定形で答え、検査結果には「反抗的であること以外、何もわからない」と書いてあったという。

そのような子どもであったから、幼稚園の入園面接があった時も滑らかにはいかなかった。面接で出されたおもちゃが気に入ってしまい、「もっとアソブ！」と言って聞かなかったそうだ。困った母は、それでは先生に伺っていらっしゃいと言うと、私はつかつかと一人で面接室に頼みに戻り、部屋から出てくると、心配顔の母をよそに、「チェッ、ダメだってさっ！」と、ひとこと言ったという。

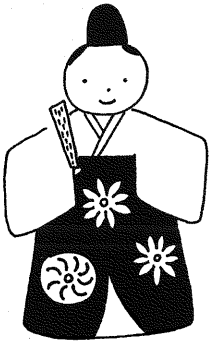
この自己中心、頑固を絵に描いたような子どもにとって、大和郷幼稚園は実に居心地が良かった。毎日が面白く、やりたいことに満ちていた。私は特に外遊びが好き

であった。思い出はいろいろある……すべり台では普通に滑るだけでは満足できずに、友だちと「勇気コンテスト？」のようなことをして、様々な技を考え出して滑っていた。目をつぶって滑る、後ろ向きで滑る、寝て滑る、腹ばいで滑る、腹ばいで頭を下にして滑る……一番、高度な技は、たしか、頭を下にして上を向いて目をつぶって滑るというものであったと思う。地面にひどく頭をぶつけた記憶がある。

マサキちゃんという親友がいて、彼との思い出も枚挙にいとまがない。例えば、彼とは秘密の空間を共有していた。そこは、大人の入れないような物置の裏を通ってたどり着く閉ざされた空間で、私とマサキちゃんはそこで立ちションベンをして男の友情を確かめ合っていたのだ。

担任の先生からも多くの出来事を語り伝えられている……片付けの時間になり、大型積み木をしている私に、先生が「かずひでちゃん、自分が使ったものは片付けましょうね！」とおっしゃったそうだ。すると、私は一つひとつの積み木を手にとっては「これは使ったかな……？」と本気でつぶやいていたという（私は、当時、日本語に対して非常に正確、かつ厳格な用法を用いていたのである）。

担任の先生は清水久仁子先生とおっしゃって、本当に優しい、美しい先生でいらした。遠足の時に、先生と一緒にお弁当を食べていて、ふと見るとアリの巣が目に入った。「お腹が空いた！」というアリの声（？）を聞いた私は、「アリが欲しがっているから先生の玉子焼きを頂戴！」と言うと、先生はご自分の玉子焼きを少し下さった。それを見ていた他の子どもたちも「僕もアリさんを喜ばせたい！」と言い出し、とうとう先生の大切な玉子焼きは、ほとんどアリへの贈り物となってしまっ



た。そんな、素敵なお若い先生でいらした。

私が先生に関してはっきり覚えている記憶は、お弁当の時である。先生がお茶を一人ずつ、コップに入れてくださるのだが、私はその途中、注がれているお茶にスプーンを差し込んだ。まさかそうなるとは思っていなかったのだが、お茶は美しい噴水のように辺りに飛び散って、机の上は大変なことになった。私は、確かに「しまった！」と思ったのだが、この責任はお茶を入れていた先生にあると思っていた。ところがこの時ばかりは、さすがの先生も笑いのない顔で私に後始末をするようにおっしゃった。今になれば、この時の先生の「いいかげんにして頂戴！」というお気持ちは痛いほどわかるが、その時は「なぜ僕が!?」という不本意な気持ちであったことを覚えている。かくも、かくも、このような子どもであったのだ。

総てがこの調子で、私は毎日が面白くて仕方なかった。自分が教育されているなどとは少しも感じていなかった。唯々、毎日、幼稚園に行くのが楽しかった。私は許容され、可愛がられ、ゆっくりと自分を外界に広げてゆく時間と環境を与えられた。今となれば、この奥にどれ程の先生方の献身とご苦労があったのかと、感謝と申し訳なさで一杯である。

これもはっきり覚えているのだが、小学校に入った時、同級生が少し障碍をもった子どもを追い回しているのを見て、ハンディーをもった子をいじめる気持ちが全く理解できなくて、私はその子を庇っていた。自分が大切にされた分、人を大切にする気持ちが自然に育っていたのだと思う。

幼稚園時代の仲間との友情はその後も続き、今日に至っている。これも、付属でない幼稚園としては異例のことであろう。

竹中京子先生との出会い

当時、大和郷幼稚園の主事（主任）は竹中先生でいらした。竹中先生は私にとっての大恩人で、この先生のお陰で私の一生が導かれたと言っても過言ではない。幼稚

園を卒業した後も、自宅が幼稚園の三軒隣であったこともあって、学校から帰るとよく幼稚園に遊びに行っていた。職員室はいつも楽しそうで、竹中先生は私を温かく迎えてくださった。その後、私が中学、高校になっても、いつも私の心には担任の清水先生、そして、竹中先生がいらした。

私が大学生となり、幼児教育の道に進もうと考え出した頃、先生は大和郷幼稚園を退職され、十文字幼稚園の主任をされていた。私が、大学で幼児教育のコースに進もうとしているとお話しすると、先生は遊びに来るようにとおっしゃって下さった。そして、数か月に渡って、週に一度、実習をすることを許して下さった。担任の先生がお休みの日、その先生に代わって、私に担任をさせて下さったこともあった。あの当時の私に……なんという先生の勇気であろうか。

大学三年の冬であったと思うが、竹中先生は当時、お茶の水女子大学の教授でいらした津守眞先生を紹介してくださった。そのご縁で、私は愛育研究所の中にあった当時の家庭指導グループのお手伝いをさせて頂けることとなった。ここでの、障碍をもった幼児との出会いは、現在も続く先生方との出会いとともに私のもう一つの宝である。その後、津守先生にはお茶の水女子大学附属幼稚園に紹介して頂き、紆余曲折を経て今日に至るのだが、これも、元をただせば総て幼稚園時代に出会った竹中先生のお導きだと考えている。

ある先達の教育者が「教育とは、教室で教わったものを全て忘れてしまった後に残る余香だ」と語っている。私は幼稚園時代、竹中先生、清水先生に一生続く香りを頂いた。そしてその香りが、これまで私を導き続けてくれていると思う。私はこの香りを基に担任をし、園長をし、今は将来の保育者を育てている。

花盗人の、あの二人の少女も、今は十歳になっているはずである。沈丁花の香りと共に幼稚園の庭を思い出していてくれたらよいな、と願う私である。

（玉川大学）

特集〈たね・種〉

植物の育成になぞらえた育児論

藤田　博子

幼児教育の父と呼び親しまれるフレーベル（Friedrich Fröbel. 1782-1852）が植物の育成になぞらえた育児論を提唱し、その理念に基づいて教育の施設を［幼稚園　Kindergarten］と名付けたのは周知のところであります。この［おさなごの花園］命名の理念について、フレーベルは、その著『続・幼稚園教育学　2：Pädagogik des Kindergartens』の中で、「神の保護と洞察のすぐれた園丁の配慮のもとにある庭においては、植物が自然と調和して育てられるように、このドイツ幼稚園では、人間という最も高貴な植物、すなわち人類の萌芽でありまた一員である子どもたちが、自己の精神および自然と一致して教育されるはずであり、またそのような教育のための道が一

般的に示され開かれるはずである」と述べています。ここでは、幼子を花園の花々に、保育者はすぐれた庭師になぞらえられ、個々の幼子が持って生まれた天与の可能性に恭しく仕え、その可能性を精一杯開花させてあげることが保育者の使命とされたのでした。

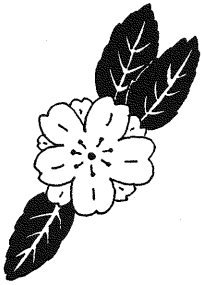
このように、育児を植物の育成になぞらえる思想は、洋の東西を問わず古来から受け継がれてきた思想であり、書物を通して知り得る限りにおいては、古代ギリシアにその源流を遡ることができます。

人類の歴史以来、営々と繰り返されてきた子どもを育むという素朴な営みは、時代によって、その観点が変遷していますが、その歴史を幾世紀にもわたる長いスパンで俯瞰するとき、そこには、植物の育成になぞらえた育児論が、あるときは本流となり、あるときは支流となり、あるときは、伏流となって、太古から悠然と流れていることが認められるのです。それは、また、その時代の人びとの自然観と大きく綯われていることがわかります。

こうした古代ギリシアに源流をもつ、自然法則の尊重や合自然の思想に裏打ちされた育児論は、ルネッサンスを経て、ルソー（Jean-Jacques Rousseau, 1712-1778）に手渡され、自然主義教育へと発展することになるのです。ルソーは、古代ギリシア時代にヘシオドスが［待つ μίμνειν］とは、決して消極的なことではない。と説いたように、［消極的教育法 L'éducation négatif］の有する積極的反面を説くのです。やがてこうした思潮は、幼稚園の創設者であるフレーベルの教育思想の源流となり、彼は、子どもを草花になぞらえて、その教育施設を［幼子の花園 Kindergarten］

と名付けたのでした。

以上のように、古代ギリシアの時代から、子どもの教育は植物の育成になぞらえられてきました。植物の育成において最も重要なことは、適時ということです。それは、農事における時宜に通じるものです。ヘシオドスは、農耕の時宜を得るためには、的確な洞察と予測とが要求されると説くのですが、この原理は教育の根本原理に通じるものであるといえましょう。時宜を知るということは、子どもをよく洞察し、発達を的確に予測し、理解しなければなりません。そして、それはまた、時機を待つということの大切さをも示唆しています。



さらに、植物の育成論において、提唱される重要な要件は、個々の植物の種子が潜めもつ、内発的発達を尊重するということです。フレーベルは『幼稚園教育学　Pädagoik des Kindergartens』の中で、「生まれたばかりの子どもは、あたかも親木から落ちてきた種子のなかの熟した核のように、自分自身のうちに生命をもっており、また、種子の核と同じように、その生命を、一般的な生命体との発展的な、だがますます精神的な関連において、自己活動的にうちから発展させるものである。」と述べています。真冬に向日葵の花を咲かせようとしたり、すみれの茎に薔薇の花を咲かせようとする園丁はいないでしょう。樫の木に林檎の実を望む農夫はいないでしょう。賢明な園丁や農夫であればあるほど、個々の植物の内発的な発達の力を信じて、個々の植物が望む環境を整

え、間接的にその開花や結実を援助することでしょう。そして、プラトンが危惧する、ギリシア神話のアドニスの園のような子どもの促成栽培は決して望まないでしょう。植物の育成にしても、子どもの教育にしても、成長や発達に必要な時間を、そのものが要求するだけ与えることが必要なのです。

ヘシドスが謳うように、[待つ μίμνειν] とは、決して消極的なことではないのです。私たちは、待つという、消極的にして積極的な教育の方法を植物の育成に学ばなければならないといえましょう。

『幼稚園教育要領』第一章総則1に示された「環境を通して」という幼稚園教育の基本は、まさに、庭師が種子の萌芽を待つように、望ましい環境を準備して、子どもたちの内発的な発達を間接的に援助するようにとの指標なのです。そのためには、子どもをよく観察し、子どもへの的確な洞察と発達への理解が必要となることでしょう。ヘシオドスが謳うように、種子を育む農事と育児とは、その精神を同じくしているのです。

（大阪芸術大学短期大学部）

参考文献

1　フレーベル著、荘司雅子・藤井敏彦訳『続・幼稚園教育学』玉川大学出版部　一九八一年
2　フレーベル著、荘司雅子・藤井敏彦訳『幼稚園教育学』玉川大学出版部　一九八〇年

青年海外協力隊で育った種

佐竹　直子

冬空の日本を後に、飛行機で四時間、向かった先は、フィリピン共和国。青年海外協力隊の保母（現在は保育士）隊員として、期待と不安という種をもって、熱気に包まれた任地の土を踏みました。事務所への挨拶やオリエンテーション、歓迎会などを終え、隊員寄宿舎に戻った私は、あまりの暑さに飲み物を求めて台所に行きました。すると、流しの三角コーナーに蛙の卵のようなものが、コップ一杯ほど捨てられているではありませんか。驚いて、しばらく観察してみましたが、動く気配はありません。丁度現れた管理人のフィリピン人女性に聞くと、彼女は大笑いして「これは、パパイヤの種よ！」と教えてくれました。その日から〝好奇心〟という種も加わり、私が過ご

した三年間（通常任期は二年ですが、延長したため）は、「これなあに？」「なぜ？」の毎日でした。

言葉は買い物で

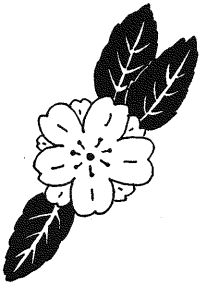
日本での研修期間中も語学の訓練はありますが、フィリピンは、島の数（約八十）ほど方言があるため、現地についてから現地語学訓練があります。これは大変楽しい授業で、ゲームをしたり、食事をしたり、散歩に出かけたりしながら行います。とりわけ現地の乗り物に乗って、買い物に出かけるのは、言葉を習得する上で最も効率的であり、これから教える立場になるとしても参考になるものでした。「好奇心」の種をもった私は、買い物の途中で、どんどんその種を蒔いていきました。お陰で次にその場所へ行くと、お店のおばちゃんが覚えていてくれ、安くしてくれたり、世間話をしたり、しっかりと種が成長していました。改めて、人間が社会生活をする上で「ごっこ遊び」を経験することが必要であることを実感しました。

市場で品物を見ながら名前を覚えたり、交渉の仕方を学んだりすることは、現地で生きていくために不可欠なことです。日本では、ほしいものをレジに持って行き、一言も会話しないで品物が手に入ったり、カタログで全て手に入ったりする合理的なしくみになってしまっています。それに比べ、フィリピンの生活は無駄が多いような気もします。しかし、毎日生きている実感、生かされている実感がありました。

命をいただき、生かされている

受け入れ先の社会福祉開発省第三地域事務所

は、ピナトゥボ火山が噴火した被災地で、私の任務は「被災地の自立支援のための保育所整備と保育計画・内容検討、保育者養成」などでした。普通スタッフの住居は、安全性の高いところにあるのですが、限られた期間で任務を遂行するには、避難所にホームステイしたほうが良いだろうと考え、電気・水道・トイレのない現地の人たちと同じ環境での生活を希望しました。最初はお客様扱いで、「何もしなくていいから休んでて」と言われ、食事もできたものをいただくだけでした。火山噴火の被災地ですから、あたりは灰だらけ、砂漠のようでした。そんな環境の中で、自給自足に向けて、生命力の強いバナナやココナツ、豆類野菜など、様々な種を植えていました。真っ白な灰の中から小さな緑の芽が見えたときは、まさに「そこに生きる希望が見えた」ようでした。



雨季になると、どこから来たのか蛙の鳴き声が聞こえるようになり、明け方まだ暗いうちに男の人たちが鍋を持って蛙取りに出かけます。戻ってくると今度は女の人たちが、蛙の皮むきをして、油でいため、にんにく、胡椒、醤油、酢で煮込みます。

お祭りや結婚式などのお祝い事があると、飼っていたニワトリや豚、番犬までも料理します。初めの頃は、ついさっきまでかわいがっていたものを解体し、調理し、試食までするなんて、「なんとむごいことを！」と思いましたが、日本ではどこでどんな育ち方をしたものかもわからず、すで

に切り刻まれパックになって売られているものを食べているわけで、どちらも食べることには変わりがありません。しかし、命をいただいて生かされている意識は雲泥の差があると思います。食欲と生き方は深い関係があるように感じました。

人間関係の種をもって

フィリピンでの生活は、学ぶことの多いものでした。保育内容にしても、何よりも基本においているのが「人間関係」で、そのためなのか国民性なのか、道を歩けば笑顔で挨拶し、大人でも友達同士手をつないで歩き、初対面の人に会うときは、必ず握手で紹介され、直接プライベートな質問をどんどんしてきます。最初はあまりに立ち入った質問に答えるのも戸惑いましたが、興味をもってその人を知りたいと思うことは、その後のかかわり方を豊かにしたい気持ちの現れと考えれば、聞かないことが失礼にも思えてきました。

人が幸せに生きるために「人間関係」が重要な種であることを学び、その種をもって帰国した私は、今地元長岡市で子育てのネットワーク作りを仕掛けています。様々な思いをもつ団体や個人、民間も行政もつながって、子どもという種が丈夫に花咲くよう育ちあえる関係を作りたいと思いながら。

丁度、協力隊で被災地を経験し、長岡で中越地震を経験し、現在では自称国内協力隊をやっていますが、ピンチはチャンス！　あの時現地の人が忘れなかった笑顔と協力、開拓と希望の種が、中越の地にも大きく花咲くように、せっせと蒔いた種の水やりでもしましょうか。

（ＮＰＯ長岡子育て支援三尺玉ネットワーク代表）

乳児の『たね』は生活の中に

濵口　敦子

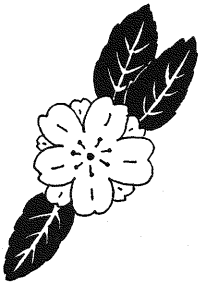
保育園で乳児と毎日の生活を共にする私にとって、子どもの中に見られる『新芽』との出会いは日々あふれるほどに満ちており、仕事とはいえ贅沢な毎日を過ごしています。昨日までネンネゴロゴロだった子が、大好きなおもちゃを手にしようと、ぐっと手を伸ばして身体をひねった瞬間に寝返りが成功したときや、ずり這いでゆっくりゆっくりと進んでいた子が、背中や腕に力を入れてしっかりと高這いし始めたときの光景は、たねが膨らみはじける瞬間に出会ったかのような新鮮な喜びを沸かせてくれます。

さて、乳児の保育においては、この『新芽』の

発見やその後の対応がいかに丁寧に扱われているかということが鍵になってきます。「できた！」ということに対して、子ども自身は無意識なことも多いので、そのときは大人側からのアクションでその子の行為を言葉に置き換え、その子自身にも「できた」ことの素晴らしさを伝えていくようにしています。子どもは、大人のあたたかな励ましや嬉しそうなまなざし、感心の言葉によって自分の行為に自信をもてるようになるからです。そして、行為の最中は子どもの集中力を削いだりその子の世界を壊したりしないように、そっと見守る姿勢も必要ですが、その子に「やったー、できた！」「うれしい！」という気持ちが芽生えたときには、やはりその子の傍らで喜びを共有したいものです。また、大人が子どもの遊びや行為に対する見通しをもち過ぎると、逆にすぐ次の段階へ子どもを誘導してしまう可能性もあります。しかし乳児保育には、次から次へと子どもが急がされる構図は合いません。ですから、まずは大人もゆったりとした姿勢で子どもが達成できた事柄自体に着眼し、行為の様子やその子の気持ちを代弁していき、子ども自身が『たねから出た芽』とじっくり向き合い、満足感を味わえるようなゆとりをもたせてあげたいと思います。

ところで、先日私の勤める保育園で『こどものくらし展』という行事が催されました。毎年行われている取り組みで、幼児クラスでは園生活で体験したことを中心に表現した絵画や造形作品を披露し、乳児クラスでは子ども一人ひとりの遊びや生活の様子を写真に撮り、コメントと合わせて子どもの成長をお伝えする機会としています。さらに、乳児クラスでは毎年テーマを決めて、遊びや

遊具、日々保育の中で大切にしている事柄などを特集し、並行して展示しています。テーマについての学びを父母の方々と保育者とが共有することでよりよい子どもの成長をサポートしていけるように、という願いが込められた取り組みです。今年は『身体の育ちと遊び』と題し、身体の成長に伴ってできるようになる遊びを分類し、更にそれらの遊びを繰り返し積み重ねていくことによって助けられる身体の育ち（乳児における身体の育ちと遊びの関係性）について写真や解説などを用いてお伝えしました。



展示には、子どもたちの実際に行われた遊びや生活の写真が使われている為、父母の方々も我が子や仲間の姿を見つけて喜びながら和やかにご覧になっていました。そして、何より展示内容に心を傾け感心して下さる方が多かったことに、私たち保育者一同も励まされた思いです。例えば、生まれた赤ちゃんが上手に歩けるようになるまでにはネンネ・寝返り・おすわり・つたい歩きなどの一連のプロセスがあるわけですが、それら一つひとつの段階が丁寧に積み重ねられていくからこそバランスのよい歩行が成り立つということをお伝えしたところ、

「うちの子も、この頃やっと上手に歩けるようになってきましたけれど、これまでにも随分沢山のことを身につけてきたのですね。すごいことですよね」

と、あらためて子どもの成長を喜んで下さる姿が見られました。また、『ハイハイの遊び』『押す・引く』『またぐ』『バランスをとる』など、動作ごとに遊びの種類を分類してその遊びがどのような身体の育ちを導いていくかということを解説した点にも様々な感想が返ってきました。例えば、『ハイハイの遊び』では、お尻を高く上げたライオン歩きやトンネルくぐり、傾斜のゆるいすべり台登りなど、同じハイハイであっても色々な遊び方があり、成長の段階によって様々な遊具との組み合わせでハイハイのバリエーションも豊かに展開していけることを写真で示した点については、

「子どもたちが能動的に遊んでいるのがよくわかりますね」

と感心されていました。

また両手両足を使って交互に身体を揺らしながら移動するハイハイは、バランスのよい身体の育ちを助け、腕や足の力をつけるとともに背筋や腹筋の力も養われる大切な運動だとお伝えすると、

「ひと言で身体を動かすといっても身体の使い方は色々あるのですね。ハイハイは、歩けるようになるまでの一時的な運動としてあるのかと思いましたが、遊びの中で長くかかわっていくものだったのですね」

と、それぞれが思い深く感想を述べてくださいました。子どもたちの中に育っていく『たね』の存在を皆で見守り、大切にしていかれるこの環境を幸せに感じた瞬間でした。そして、子どもをとりまく大人たちの配慮によって、その子自身が、自分の中に芽生えていく新しい世界を満喫できる環境を作り続けていきたいと思いました。

（かしのき保育園）

永遠の情景

中嶋　正敏

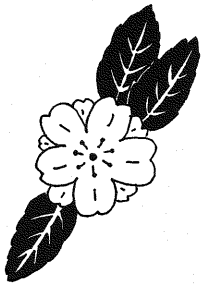
この稿を書いている今は秋本番である。職場のそばにはどんぐりのなる木々があって、毎年おびただしい数の実が秩序なく路面に散乱しては、嬉々としてそれらの後を追う子どもたちの光景を目にする。どんぐりにはいろいろな形があり、眺めているだけでなんとなく楽しいものだ。マテバシイの実などはフライパンで炒めればピーナッツみたいに香ばしく、つまみとしてもなかなかのものである。そんな意味で大人でもちょっとワクワクとさせるその光景が、毎年毎年飽きもせず今の時期にきちんと再現されることに気づくにつけ、これはもしかしたら今後もずっと繰り返し続いて

いく光景なのかとも思い、そして、自分はまた一つ確実に歳を重ねたことを実感する。

木々は大きく枝を張り、堂々としてとても誇らしげである。樹齢何年なんだろうか、などと思いを巡らせてみたりもする。だがそういえば、そもそも植物はなぜ大きくなるのだろうか。そんな「あたりまえ?」なことも突き詰めて考えていくと実はちゃんとはわかっていない。ちょっと専門的な話でとっつきにくいかもしれないが、植物が成長する過程においては普段、必要以上に大きくなったりしないように、平たく言うところの「つっかえ棒」の役目をするものがある。大きくなれ、という時にはその「つっかえ棒」が減り、逆にそれがあるうちは決して大きくなれない。だから例えばこの「つっかえ棒」がすべて壊れてしまったら、ひょろひょろと細く丈の長い植物になり最後はパタンと倒れ絶えてしまう。そんなバカなことにはなりたくないハズだから、「つっかえ棒」は懸命に頑張っているのだ……。

そんな講釈を垂れていると、まんまと子どもに言われてしまった。「植物は根から水を吸って、太陽の光を浴びて大きくなるんだよ……パパ、そんなことも知らないの?」。唖然、呆然。これは「木を見て森を見ず」なのか。子どもというものはそもそも何ら臆せずにモノを言い、珍妙? な発想でも一向にお構いなく次々と披露してくれる。「無限の可能性」とはよく言ったものだ。知らないだろうなんてこちらが高をくくっていると、実は子ども特有の眼でいろいろなことが極めてよく見えているものであるらしい。

植物も人も根元は同じだ、などと考えるのはいささか乱暴かもしれないが、もしかして子どもの頃は敢えて木を見ないでも済むように「つっかえ棒」がからだのどこかに配されているのかしら。だから、『子どもにとっては極めて自然に「森」がよく見えていて、やがてそれが「林」から構成されていることを知り、そしてその中にある「木」の感触になじむにつれて次第に「森」が見えにくくなっていくのかも』なあんて全くもって大人の視点で理屈をつけてみた。細かい部分を知ればさらにその先を知りたくなる。どんどん狭いところへ入りこみ、先にはわかれ道がいっぱい現れる。そうやって気がつくといつしか迷路に陥り、迷ったりしているうちに例の「つっかえ棒」は無惨に壊れ、成長と共にすっかり「森」を見ようとしない眼になるのかもしれない。



「つっかえ棒」は一度壊れたらもう後戻りできない。子どもの感覚は容赦なく剥げ落ちていく。おびただしく路面にころがるマテバシイを懸命に追い、一杯になったポケットを見せながら得意満面の笑顔でなおも駈けずり回る子どもたちの眼。いつ果てるとも知れないその光景の中に、言い表せないほどのまぶしさを感じる瞬間でもある。

（東京大学）

高尚な精神を育てる教育

津守　眞

元気さと悲しみとが同居する子どもの日常

幼児が大人との生活の中で、急に一人前と感じられる時がある。大人と会話し、かけひきして自分の目的を達しようとするときなど、小さな大人に思えて、ついこの間まで無垢な赤ん坊だったのにと寂しさをすら感じる。二〇〇四年一月号「赤ん坊讃歌」に記した小さな幼児は、そんな年齢になった。ペロペロキャンデー（棒つき飴）が欲しくて、母親の傍らでぐずぐず言って交渉して、とうとう買ってもらった。それを手に持って私の家に来るなり、新聞紙を丸めて長い棒を作った。もっと長くしたい。大人が手伝って天井まで届かせた。嵐の後、西の空に射した夕陽の光に、声をあげて上を見たその子である。私共は生まれて間もない赤ん坊の中に生涯にわたってつづく上を見上げる高い精神が備わっているのを見て感動したのだった。成長とともにそれはどこにい

くのか。

四歳になったその子は新聞紙の長い棒を振り回してバンバン、バンバンと大声を出した。銃だという。その声も戦いごっこで、赤ん坊とは違った精悍な顔つきに見えた。前日に友達の家に遊びに行き、その遊びをすることが友達の仲間に加わった証のようであった。銃という言葉を使っても、子どもは人を殺す武器だと思っていない。元気一杯のエネルギーを人に向け、大きな声を出す。その元気さがあってこその子どもである。そうわかっていても私の心には引っかかるものが残った。現代の子どもたちはテレビやビデオでそういう光景を見なれている。

四歳の子どもはひとしきり棒を振り回すと、庭で水を流した。二、三歳の頃から幼児の好む遊びである。水は流れるうちに思わぬところに水路をつくり、水たまりができる。手が水に濡れる感触、水が飛び散る光景、水が落ちる音、水が提供してくれる面白さは多岐である。その面白さを、相当の時間満喫した後、子どもは堤防をつくって水を塞き止め、水路をつくり、土手の土が崩れると土をのけ、流れの通りをよくし、流れの向きを変えるなど、目的意識をもって手を使って遊んだ。こうなると時間の過ぎるのも知らず、大人の助けも借りずに遊びに没頭する。つい先頃まで見られなかったやり方である。昼食のパンを食べながら、そのパンをちぎり、プディングをつくると言って牛乳を入れ、母親に手伝ってもらってオーブンに入れて焼いた。やり終えたとき、友達の二歳の女の子が、今日は風邪を引いて来られなくなったと電話があり、泣いた。活発に遊んでいるときの怒る泣き方ではなくて、さめざめと泣いた。そこまで見たとき、この日は朝からこの女の子が来るのをどんなに楽しみにしていたかが私共にわかった。オーブンでプディングを焼いたのも、この子に食べさせたいと思っていたからだった。私は幼児の心の優しさと、友達の力の大きさを感じさせられた。

保育の前・最中・後

保育の実践で毎回考えることがある。保育の「前」と、「最中」と、保育の「後」とである。一日が始まる前には、何が起きるかわからない。不安と期待と緊張がある。その時に考えることは、毎日繰り返す朝の祈りである。何があっても受け止められるように心の備えをする時である。保育の最中は、目の前の子どもの様子をよく見ることに一生懸命で、考えるというよりも、そのときに自分が何をすることが必要かをとっさに判断して行動する。座って考えるわけではないが、行動に伴う思考である。そして保育が終わってから一歩退いて省察する。今日の保育の全体が省察の対象になる。「最中」は相手がその思いを遂げるようにと考えるから瞬時の緊張を伴う。「後」は過去、現在、未来にわたって頭の中で自由に行き来しながら考える。

新聞紙を丸めた長い棒に戻ろう。

幼児が銃と言って棒を振り回してバンバンと大声を出したとき、私は快く思わなかった。

戦争玩具

私共の国では、第二次世界大戦直後、玩具の銃や刀を子どもに持たせない時期があった。いまでは考えられないことであるが、それが社会の風潮だった。私は出征する前に父が揃えてくれた日本刀を、錦の袋ごと進駐軍に引き渡した。青年の私が自分の日本刀を手にした時の高揚した気持ちは忘れないが、私も父もそれを手放すことを屈辱とは感じなかった。その代わり、二度とそれを使うことはないという、長い間心の底で望んでいた平和国家を手に入れたのだから。

それからずっと経ってからも、戦争玩具は子どもに与えないという時期が続いた。私が保育の実践の場の責任をもつようになったとき、よそから頂いた玩具の中にピストルや刀があった。私はそれらを取り出して屑籠に捨てた。それを見ていた大人たちの中に議論が生じた。ピストルや刀を持たないと大声が出せない子もいる、子ど

もには元気さがだいじなのだから、元気さを誘う玩具は必要ではないかと。時には激しい行動になるくらい憤慨したり、怒ったりすることがなかったら現実の社会に生きる人間とはならないだろう。それでもなお刀やピストルの玩具を保育室におくことに私は納得しかねた。

ちょうどそのころ、一九八五年、ユネスコ出版物マドレーヌ・グタール著『平和の種子を育てよう―幼児期からの国際理解と平和教育―』を荘司雅子先生の監修で、私共ＯＭＥＰ（世界幼児保育・教育機構）日本委員会が翻訳した。その中に、スウェーデン政府は一九七八年の一月八日から戦争玩具の販売を禁じたこと、一九八二年九月十三日に、欧州議会は、45対82の賛成（12の棄権）で、欧州共同体の国々で、武器で遊ぶことを法的に禁止することを決定したことが記されていた。そして、日本製の精巧な戦争玩具が輸出されていることが特記されていた。

そのときからほぼ二十年を経、イラク戦争が起こり、世界は急激に変化した。戦争玩具どころではない、大人の戦争が世界中に蔓延激化している。そればかりか、日本国憲法は世界の希望だったのに、日本人自らの手で変えられようとしている。戦争玩具を子どもに与えない、使わせないというほどの大人の気概があったら、日本の社会はもっと違う進展をしていたろう。

生まれたばかりの赤ん坊の、高みから射す光への感動は、天井にまで届く銃への憧れに置き換えられてしまうのか。そうではないことは明らかである。次の瞬間には子どもは高い樹木の上に残った紅葉を取ろうと新聞紙の長い棒を上に伸ばした。パンパンと叫んで長い銃にする子どもの心には高みの光へと向かう心がある。それを高尚な精神へと育てるのが教育の力であろう。そこから本式の教育が始まる。

小学校の学芸会で

このことを考えていた時、私は小学校五年生の男子の孫からぜひ見に来てくれと言われ小学校の学芸会に行った。八郎潟にまつわる昔話を音楽劇にした作品で、大水

から村人を救うために八郎が犠牲になるという筋だった。数人ずつのグループでそれぞれのパートの台詞とナレーションを受け持ち、歌の伴奏もすべて児童たちによって上演された。すべての台詞を全員が暗唱したのだという。その子は単独で出演するのではないのに是非に私を招いてくれたのだった。練習の期間数週間、きょうだいたちからうるさいと言われるので押し入れの中で大声で暗唱していたのだという。それだけのことがあって、出来上がりの全体も見事で、参観の大人たちの感動を誘った。私は三十数人の子どもたちに自主的に（と子どもたちは思った）任せた担任の先生の苦心を察した。日本の伝承文学の中にある普遍的な高尚の精神がここにもある。

小学生の子どもをもつ友人にこの話をしたところ、どの人も自分の子どもと先生と学校について、同じ様な体験をしていた。そして、いまの学校教育に希望をもっていた。こまかく言えばいろいろ不満はあるけどねと付け加えた。

高尚な精神の教育

「彼らは剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず、もはや戦うことを学ばない。ヤコブの家よ、主の光の中を歩もう」イザヤ書の言葉である。二千八百年前のイスラエルで、若者も老人も、女も男も心に抱いた幻であり、理想である。ここで言われる「主の光」を心に抱きつつアウシュヴィッツの強制収容所にユダヤ人たちが送られていったのは、われわれの記憶に新しい。わずか六十年前の同じイスラエルである。戦争に敗れた時に日本人はこの幻が実現したと思った。しかし現代の日本もイスラエルも、社会の状況はこの理想からほど遠い。

世界のこの現状にもかかわらず、赤ん坊が高みの光へと向ける目、それを感動をもって見る大人の目の中に高尚な精神を育てる土壌がある。どのようにそれは後の時期に引き継がれてゆくのか。紆余曲折があろうが、もう暫く追求したい。

（保育研究者）

たけのこ幼稚園とラジオのおっちゃん(12)

庄籠（しょうごもり）　道子

ありがとう、おっちゃん　―あとがきにかえて―

私は五年半、幼稚園の先生をして働いていました。そのうち、四年間勤めたところが、このお話の舞台となった幼稚園です。

おむかいにある保育所（お話の中ではたけのこ保育所）で一年から三年間過ごした子どもたちが、この幼稚園には入園してきます（保育所に行かなくて幼稚園に入園する人もいました）。そして、一年間を過ごした後、お隣にある小学校（お話の中ではた

けのこ小学校）へと巣立っていきます。

一年目は十七人、二年目は二十二人、三年目は二十一人、四年目は十八人の子どもたちと、この幼稚園で過ごしました。たくさん遊んで、いっしょに笑ったり、怒ったり……とっても楽しい四年間でした。

この幼稚園には、本当に『ラジオのおっちゃん』と呼ばれるおっちゃんが、毎日のようにやってきました。そう、このお話に出てくるエピソードは、ほとんどが本当にあったことなのです。ただし、四年間で七十八人いた子どもたち、みんなに登場してもらうと大変なので、幼稚園の子どもは、十八人だけにしました。たとえば、三人組の中の**りょうた**は、ふたりの男の子がモデルです。ふたりをひとりにしたわけです。**あいこ**と**なみか**も何人もの女の子がモデルになっています。

勤めて三年目の七月に、こんなことがありました。

一学期もあと何日かで終わりという日のお昼ごろでした。もう短縮授業になっていました。幼稚園の子どもたちはもう帰りました。私たち職員（このお話の中でいうと、竹田園長先生と田原のおばちゃんと私・籠先生の三人です）は職員室で仕事をしていました。

幼稚園の前の道を、南村（仮名）の一年生の子どもたちが七人、二列に並んで帰っていきます。私たちが手を振ると、「せんせー、バイバーイ！」と手を振って応えてくれます。背中にはランドセル、手には鍵盤ハーモニカを持っています。夏休みに家で練習するようにと持って帰っているのですね。

一年生は、学校に行く時は村で集まって上級生といっしょに行きます。六年生が一生懸命お世話してくれます。帰る時は、四月ごろは、小学校の先生が各村ひとりずつついて、送ってもらっていました。幼稚園の時は、おうちの人や当番のおばちゃんといっ

しょに登降園していましたから、子どもたちだけで帰るようになってから、まだ二か月とちょっとしかたっていないわけです。自分たちだけで帰ることができるようになって、すごいなあと、私たちは見送っていました。

あの学年は、南村の子どもたちが七人。「特別多いわね」と職員間で話をしていました。あの中の**ようこう・たか・しょういち**（みんな仮名です）の三人の男の子は特別元気もので、保育所の頃は、すっぱだかで自転車に乗って村中を走り回っていたのだそうです。幼稚園の時も、よく元気に遊んでいました。竹馬も得意で、大人の背くらいのところに足を置く高い竹馬に乗れるようになり、地方局のテレビがインタビューにきたのでした。

そんな話をしていると、**ようこう・なな・ゆうた**の三人が幼稚園に駆け込んで来ました。

「どないしたん？」

「先生、**ひろし**くんが、おなか、痛いって」

はあはあ言いながら三人は口々に言います。

「そら、えらいこっちゃ。どこ？」

「こっち」

私は、三人について走ります。幼稚園のかどを曲がって少し行った道のはた、田んぼの横の電信柱の所に**ひろし**と**たか**と**りりこ**がいました。**ひろし**は電信柱に抱きつくようにしています。**たか**はその隣で、背中はもちろんお腹にも右腕にも左腕にもランドセルをかけて仁王立ちしています。**りりこ**が左右両手に鍵盤ハーモニカを持って、**ひろし**に寄り添うようにそばに立っていました。

「**ひろし**くん、おなか、痛いん？」

「うん」

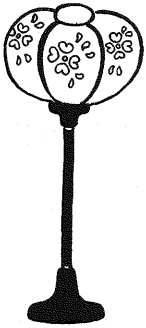
苦しそうです。

「トイレに行きたいんとちがう？」

「ううん」

「そうか……どうしよう。とにかくおうちに帰ろうか。歩ける？」

「ううん」
「じゃ、先生がおんぶするわ」
私がひろしをおぶいました。たかが左右の腕にかかえていたランドセルは幼稚園に走ってきたゆうたとななのものでした。ふたりは自分のランドセルを背負います。だけど、たかがお腹にかけているランドセルはひろしのもの。ひろしをおぶっている私ももう持てないし、まだ一年生のたかに二つのランドセルで歩くのも無理。困ったな。どうしよう。
すると、幼稚園とは反対側からしょういちが走ってきました。よっぽど必死で走ってきたのでしょう。しょういちは、はあはあと苦しそうに息をはきながら、



「今……おかあさん……車で……来るって」
と、やっと言いました。しょういちの家は、そこの四つ角のむこう。おかあさんを呼びに行ったのですね。しょういちはランドセルを家に置いてきたみたい。
「しょういちくん、ひろしくんのランドセル、背負って」
「うん」
しょういちは、さっとひろしのランドセルを背負いました。さあ、出発。
四つ角の信号を渡った時に、しょういちのおかあさんの車が見えました。信号を渡って橋のたもとに来た時に、しょういちのおかあさんの車が横付けされました。
「先生、すみません」
しょういちのおかあさんは、まるで自分の子どもが世話になったみたいに言いました。私は、車の座席にひろしをおろしました。ひろしのランドセルを

背負ったしょういちが隣に乗り込みました。りりこが、ひろしの鍵盤ハーモニカをしょういちのおかあさんに渡しました。

「先生、ありがとうございました」

「いえいえ、あと、よろしくお願いします」

車を見送って、ほかの子たちと別れて、私は幼稚園に戻りました。職員室で報告したら、

「えらいねえ。南村の子たち、みんなで一致団結して」

とふたりとも感心しました。

あのままひろしの家に行って、ひろしのおかあさんが留守だったらどうするんだろう、とふと思いました。でも、しょういちのおかあさんは、まるで自分の子が世話になったように言いました。南村のおかあさんたちがみんな行ったり来たり仲よしなのを知っています。何も心配いらないと思いました。

しばらくして、ひろしのおかあさんから電話がかかりました。どうやら三日ほどうんちが出ていなかったらしく、トイレに行って、けろりと良くなったそうです。ひろしのおかあさんは翌日わざわざ幼稚園までお礼を言いにみえました。律儀な方です。

そうそう、翌日、小学校のアスレチックに遊びに行った時、ゆうたやようこうたちがいたので、

「きのうは、えらかったねえ。みんなで協力して」

とほめると、ゆうたがまじめな顔で、

「うん。ひろしくんな、三年もうんちがたまってたんやて」

と言いました。私は吹き出してしまいました。

この話を、私は家に帰って、夜、夫に話しました。夫は、

「今どきめずらしい子たちだなあ。昔は当たり前やったけど。昔はどの村にもガキ大将がおって……」

と話してくれました。「昔は当たり前やったけどなあ」そのせりふ、どっかで聞いたなあと思いまし

た。

そうだ。ラジオのおっちゃんの話をいろいろな人にしたら、何人もの人から、

「昔はいた、いた。そんな人。私が小さい時にも……」

と、いろいろなおもしろい人の話を聞いたのでした。

たけのこ村には『昔』が残っているんですね。たいていの子どもがおじいちゃん・おばあちゃんと同居しているか、すぐ近所に住んでいます。きょうだいが多く、三人きょうだい・四人きょうだいもたくさんいます。小学校の運動会には、老人会も婦人会も消防団も……村中の人が集まったような騒ぎです。小さな子を連れて歩いていると、いろいろとお声がかかります。どこの子か、みんな知ってるみたい。誰かが亡くなると、近所の人が集まってお葬式をします。お菓子がもらえるので小さな子どももお葬式に来ます。小さな子からお年寄りまで、村中の人が両脇に並んだ道を、霊柩車は出発します。村中の人がお見送りするのですね。公民館で炊き出しもします。

そんな五十年前の日本なら当たり前だった『昔』が、たけのこ村にはまだ残っているのですね。その『昔』の村の包容力が、ラジオのおっちゃんを支え、子どもたちを仲よくたくましく成長させてくれるのでしょう。

もちろん、『昔』は何もかも良かった。『昔』に戻ろう。なんて言いたいわけではありません。女性には選挙権のない『昔』もありました。親が決めた、顔も見たことのない人と結婚するのが当たり前という『昔』もありました。お国のために、一人ひとりの命が犠牲になった『昔』もありました。アジアの国々に行って、たくさんの人を殺した『昔』もありました。そんな『昔』には、けっして逆戻りして

はいけないのです。

村の中の子どもたちが、みんなで野山を走り回って遊んだ『昔』。おとなたちが、自分の子もよその子も、いっしょに世話をして、悪いことをしたら同じ様に叱っていた『昔』。一人暮らしのお年寄りがいたら、近所の人たちがおかずを持ち寄ったり、家族のようにお世話した『昔』……。

『昔』を維持するのって大変なことがいっぱいあるんだと思います。維持するのが簡単で楽なら、日本中に『昔』が残っているはず。違う世代の人と暮らすことは、やはり腹が立つことやらつらいことやらあると思います。隣近所の視線がうっとうしいことも多いでしょう。だけど、たけのこ村の人たちは、やってきたのですね。けんかもしたかもしれないし、ぐちを言い合ったり、ひとりで泣いたり……いろいろあっただろうけれど、だけど、わずらわしくても捨てないで、日々を暮らしてきたのですね。

実は、私は、たけのこ村の隣の校区に住んでいます。たけのこ村にとてもよく似ています。この村にも『昔』が残っています。いいところです。でも、違うところがあるのです。

私の娘は、小学校三年生の時に転入したのですが、やれ、制服のブラウスのえりに模様がついてるだの、くつしたに線が入ってるだの……少し人と違うとすごく責められました。あまりのうっとうしさに娘は学校に行けなくなりました。

たけのこ小学校には制服がないし、変わったかっこうをしていても、人と違っていてもそんなに責められることはないように感じます。

たけのこ村は、ラジオのおっちゃんを支えてきました。そして、おそらく、おっちゃんを支えることで、知らず知らずのうちに村の包容力をより大きくしてきたのではないかという気がしているのです。その包容力の大きさは、村の子どもたちを、こんなにしあわせにしています。

大阪の池田の附属小学校で、何人もの子どもたちが殺されてから、幼稚園も小学校も保育所も「安全管理」にますます気を使わなければならなくなりました。たけのこ幼稚園の門も、今までは大きな門は子どもが全員来たら閉めていましたが、横の小さな門は開けっ放しでした。事件後は小さな門も閉めてかんぬきをかけるようになりました。

ラジオのおっちゃんが来られなくなったらいやだなと思いました。でも、心配いりませんでした。おっちゃんは「鍵」が、とても得意なのです。するするっとかんぬきを開けて、今までどおり遊びに来てくれます。保育所も小学校も同じです。

「知らない人が幼稚園に入ってきたら、すぐに先生に知らせてね」

子どもたちに話しました。子どもたちは大きくうなずきます。

今までも、業者の人とかが入ってくると知らせてくれていました。あやしい人影に、私たち職員は目を光らせます。

ラジオのおっちゃんが小さな門のかんぬきを開けて入ってきます。子どもたちは何も言いません。当たり前の顔で遊んでいます。

初めて見たおまわりさんがパトカーに乗せて連行してしまうほどの風貌のおっちゃんだけど、たけのこ村の子どもたちにとっては、「知らない人」でも「あやしい人」でもないのですね。小さい時から見慣れた、「知っている人」なのですね。

「おっちゃん、おはよう」

当たり前の顔であいさつする子どもたちを見ながら、私は、みんなが少しずつ努力をして『昔』を維持してきたことのすごさ・大切さに、心から感動します。

（保育研究グループ　はるにれ）

☆この連載は今回で終わります。

編集後記

本誌に十二回の長きにわたり登場してくれた「たけのこ幼稚園とラジオのおっちゃん」ともお別れだ。なんとも切ない。この「おっちゃん」については、何年か前の保育学会で庄籠先生が「研究発表」されていたので、その時から（論文の中で）知っていた。こういう人物について、保育研究として発表されるアイデアの奇抜さ、視点の先鋭さには驚いていた。今回解説されているように都会では今、「おっちゃん」的人物に対して防犯ブザーを子どもに持たせて「警戒」中なのである。

しかし、いったい私達は何をほんとうに「警戒」すべきなのか。津守先生の文章を読み、鋭く問われる思いがした。ピストルを持ってバンバンと遊ぶ子どもを前にして「まあいいかな」と、うっすらとよぎる抵抗感を見過ごそうとしていた自分（どうせ遊びだからと）に気がついた。武器は玩具になりうるのか。攻撃性と暴力とを混同していたのではないか。「遊び」ならなんでも許されるのか。演習なら？　子どもが遊ぶことの意味についての問いが、そして子どもに環境を用意するという大人の責任についての問いが、浅薄にすぎるのではないか。

卒園の三月。幼稚園や保育園の先生方にとって、日々の「省察」の総括月間である

＊本誌へのご感想や投稿希望などはyoujimail@yahoo.co.jpまでお願いいたします。

（浜口）

幼児の教育

第一〇五巻　第三号
（二〇〇六年三月号）
定価五五〇円（本体五二四円）

発行　平成十八年三月一日
編集兼発行人　浜口順子
発行所　日本幼稚園協会
〒112―8610東京都文京区大塚二―一―一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
印刷所　図書印刷株式会社
〒108―8620東京都港区三田五―二二―一
発売所　株式会社　フレーベル館
〒113―8611東京都文京区本駒込
六―一四―九
☎〇三―五三九五―六六一三（営業）
☎〇三―五三九五―六六〇四（編集）
振替　〇〇一九〇―二―一九六四〇

☆　本誌ご購読のご注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

好評発売中！

子どもはどのようにして〈じぶん〉を発見するのか

子どものことばと時間と空間と

岩田純一　著

子どもは、こんなにもいきいきと
「あした」を思い描いて、
自己を育てていく…

19×13cm　232頁
定価1,680円(税込)

子どもたちは、「きのう」より「きょう」を
懸命に生き、これからやってくる「あした」を
思い、未来に向かって生活しています。
では、子どもは生まれて成長していくなかで、
「きのう」の〈じぶん〉は「きょう」の
〈じぶん〉と同じであり、
「あした」も同じ〈じぶん〉が
続いていくという認識を、いつ、
どのようにして獲得していくのでしょうか。
豊富な保育のエピソードをとりあげて、
子どもたちの育つみちすじを考えていきます。

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育　第一〇五巻　第三号　平成十八年三月一日（毎月一回発行）昭和二十三年四月十五日第三種郵便物認可

最新刊

保育所のガイドライン新・第三者評価を読み解く

—自己を点検し、評価を受ける

小笠原文孝・小出正治　共著

平成17年5月、
保育所のための第三者評価ガイドラインが、
新たに生まれ変わって国から示されました。
本書では、この新・ガイドラインを、
詳細に解説していきます。

A4判
定価：2,940円（税込）

【目次から】

PART1　保育所の第三者評価総論
1・第三者評価とは？
／その本質と意義・目的
2・さまざまな評価の視点
～「何を」「どこまで」評価するのか～

PART2　評価基準ガイドライン解説
評価項目Ⅰ　福祉サービスの基本方針と組織
評価項目Ⅱ　組織の運営管理
評価項目Ⅲ　適切な福祉サービスの実施
評価項目A

PART3　資料

定価　五五〇円（本体五二四円）☆

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部（03）5395-6608にお問い合わせください。